

日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会 第20回学術集会を終えて

学会長 片田 範子
(兵庫県立大学看護学部)

日本小児看護学会第20回学術集会が平成22年6月26日・27日に開催されました。この学術集会には日本小児看護学会の20周年記念事業も並行して行われましたために、近隣の学会員の皆様には幾重にもお世話になりました。20周年記念事業については学会誌に別冊として特別号が組まれますので、そちらをぜひご覧になってください。

20年の節目で行われる学会であり、その準備に当たっては、「これまでの小児看護学会から次世代に繋がるもの、発展していかなければならないものはなんだろう」という疑問から出発したように思います。プログラム委員会を中核に企画委員会全体で、討議を重ね、『次代への看護の挑戦 子どもたちの権利を保障し生活をデザインする』というテーマになったのも、我々は今まで、子どもたちの権利を守ることを主張してきたかという反省も含め、これからこの役割が重要になる時代であり、「どのような状態にいる子どもでも、その人たちの生活をその人たちに合ったもののできるような支援を看護師が自律して行えることが、小児看護の意義」と考えてのことでした。このような基本的考え方をもとに、会長講演としては、小児看護の主体はあくまでも子どもたちであり、セルフケア看護理論に流れる主体を明らかにしながら、看護する方法を見出す道筋をお伝えしたいと考えました。

特別講演では、社会の中に存在する子どもたち全体にとって、命を大切にすることを伝えることについて、他領域の方々がどのように取り組んでおられるかをうかがうことができました。看護師一人ひとりの社会化の必要性もあったように思います。教育講演では、「子どもの人権と尊厳こそ看護が常に取り組むことであり、これまでもこれからも目をつぶってはいけないうことではないか」ということ

から、インターセックス（性分化疾患）の子どもたちが直面する現状を語っていただきました。シンポジウムは、子どもたちにとって必要なケアを行うためには、役割拡大をせざるを得ない現状について、現場の方々からの主張がありました。口演は95題、示説は99題と多数の新たな知見を発表していただきました。テーマセッションでは、現在の課題となっているテーマに沿って、その道の専門家達が議論する場を提供していただきました。ナーシング・サイエンス・カフェでは中学・高校生たちの参加を得ることができました。日本看護系学会協議会からのグッズも持ち帰っていただきました。

参加者が1470名を数え、各プログラムでの活発な意見交換が行われていました。梅雨時の学会となったため、会場は神戸のポートピアホテルで行いました。学会は多数のプログラムが行われる中、何を自分が得たいのかという選択を迫ります。主体的に様々な所へアクティブに参加して下さった方々に感謝です。

運営についてですが、学術集会をお引き受けした時点から、理事長・学術集会長の重なりは覚悟していました。しかし、学術集会は企画委員会、20周年企画は理事会それぞれのメンバーが見事にそれぞれの役割を担って進行していただけました。会長・理事長としましては静観し、時々参加者数の心配がよぎりましたが、「学会は皆で作るもの」

を心から再確認した次第でした。一緒に事業運営を支えてくれた神戸コンベンションセンターからのコメントでは、「企画・実行・ボランティアに至るまで、ホスピタリティを実践する様を見せてもらった」と言っていただけました。看護の本體ですから。。。。とはいえ、本当に多くの皆様方の底力に支えられて可能になったと思っています。



懇親会



ナーシング・サイエンス・カフェ

日本小児看護学会第20回学術集会に参加して

■ 吉武 香代子（日本小児看護学会名誉会員）

日本小児看護学会の記念すべき第20回の学術集会は、片田理事長が学会長を務められ、1470人の参加があったと聞きました。学会長講演もその他の特別講演も示説を含めた194題にのぼる研究発表も、とても素晴らしいものでした。学会の20年間の歴史を語る展示にも、多くの貴重な資料が集められていました。

1991年8月、発起人18人による学会設立の会、1992年2月、真新しい東京慈恵会医科大学医学部看護学科の講堂で行われた熱気あふれる第1回学術集会、そして、学生食堂で行われたささやかな懇親会を知るものとして、さまざまな感慨がありました。出席者1人ひとりをお互いに紹介しあっていた心暖まる一時であったことを、鮮明に記憶しています。

発起人のメンバーを中心として発足した最初の役員の中で、私は学会長に推薦されて、3年後の信任投票を経てほぼ6年間学会長を務め、東京慈恵会医科大学の定年退職とともに一切の役職から離れました。新しい役員を信じ、一切のかかわりを持たないというのが私の信条でした。

あれから10数年が過ぎ、研究学会は日本小児看護学会となり、会長は理事長と呼ばれるようになりました。2代目以降の理事長のご尽力によって、学会はめざましい発展を遂げ、会員数も大幅

に増加して、1日だけだった学術集会は2日となりました。いつの間にか会場には有名なホテルが選ばれるようになりました。

私は2000年に名誉会員にさせていただき、懇親会にも毎年ご招待をいただいて、年1回かつの仲間とお会いできる機会を、1回も欠かすことなく楽しませていただきました。

素晴らしかった第20回の学術集会を最後に私はこの学会への出席に幕を引くことにしました。学会とは少し距離をおかせていただくことにし、少し離れたところから学会のますますのご発展を願っていきたくと思っています。まだまだ顔見知りが多い働きざかりの会員の皆様も、そして私はや私とは遠い存在となった若い世代の皆様も、すべて小児看護を心から愛する仲間であることを信じて、今後のご活躍を遠くから見守らせていただくとつもりです。

私ごとですが、看護の世界に生きて60年を機にささやかな自伝を出版し、一つの区切りとしました。幸いにも健康には恵まれており、これからは船の旅や島めぐり、岬めぐりを楽しみたいと考えています。それでもかつての私のように忙しくはありませんので、皆様の方からお声をかけていただければ嬉しく思います。

これまで、本当にありがとうございました。



「リレートーク」 田原幸子さん

自己紹介

北アルプスを一望できる新潟の山間で生まれ育ちました。最も美しいのは冬の日の夕方でした。刻々と色の変る山々を見ていた感覚を今も憶えています。私はいつの頃からか自分を「山の石ころ」と思うようになり、事あるごとに石ころと思い見っていました。

看護職になったきっかけ

進路を決めかねていると、とうとう父が介入。「こんなところがある」と見せられたのは看護学生募集の新聞広告でした。なぜか即決し受験しました。看護の仕事は知らないも同然でした。一年生の実技実習の導尿には驚きでした。同時に感染の危険性や導尿される人と思うと責任の重さで身が震えました。これが看護師を目指す自覚のはじまりだったように思います。

新人時代の思い出

慶応・厚生女子学院を卒業。小児科病棟を希望しました。理由は入院中の子どもたちが愛おしかったこととすてきな先輩ナースが「卒業したらおいでね」と誘ってくれたからです。この方はこの学会発起人のひとり川出富貴子さんです。彼女からは看護の基本、勉強すること、上手な余暇の過ごし方など教わりました。かれこれ50年の付き合いです。思い出のひとつは点滴準備のことで、1960年の初期は、処方された薬剤を注射器で正確にはかり、イルリガトル（容器）に入れて点滴液を作りました。リンゲル液かブドウ糖液だったかが欠品で追加が遅れてしまいました。その重大性を主治医に質問されて、電解質バランスの問題をかわらうじて答えることが出来ました。答えられなかったら仕事を辞めたかも知れないほど怖かった思い出です。

また、このころインスタントラーメンが開始されました。子どものお夜食は家族から預かった好みのものでした。子どもたちのラーメンを一緒に煮て、自分もうれしい気持ちで持っていきました。良雄くんは「僕のは、エース



後列左端が筆者

コックだ！」と怒りました。私は心から謝りました。この時に「ひとりひとりを大切にする」を心に深く刻み込みました。

小児看護の魅力

小児看護の魅力は、子どもたちとの対話です。子どもはどんな小さくても、弱く・自己主張が少なくても話しかけてくれました。目も表情も手足も話しかけています。触れればさらに元気さ、不安、喜びを伝えてくれました。幼児病棟から乳児病棟へ配置換えになったナースは元気がありません。「どうしたの？」と聞くと「乳児は反応がなくて、つまらない」と。「そお？ ちょっと、病室の入り口に立ってみて・・・そしてひとりひとりを見て・・・」。入り口に立った彼女は自分でもびっくりしたような顔で「わかりました！」と言い、前にも増して素敵なナースに変身しました。乳児との対話が彼女を幸せにしました。

専門の知識と技術をもって一市民として、地域の中で、子どもの看護と看護教育ができたこともうれしいことでした。1987年に立ち上げた「小児がんの子どもとその家族を支援する活動」では、医療・福祉・教育分野の学生、現役看護師をはじめ社会人とともに活動しました。合い言葉は①自分ができることを見つけて、一生懸命それをしよう②私が楽しければ、みんなも楽しくなる！です。現在は、住む場所の都合で実際の活動から離れています。

ストレスの解消法

仕事やボランティア活動で「不完全でもいい、でもいい加減ではない、これが私の精一杯の結果だ」という生き方を学びました。今もこの生き方で友人たちとトレッキングを楽しんでいます。低酸素の山行きのために有酸素運動に励み、筋力も付けました。リコーダー演奏も初めての挑戦です（もしかして脳トレかも?）。小さな変化を楽しんでいます。

後輩たちに期待すること

いま、一番関心あることを一生懸命してください。精一杯の結果を喜ぶことができるといいですね。そして公私ともに何事にも関心を持ってください。所詮、公私とも「私」なのですから。その時の幸せがあなたの看護を、人生を豊かなものにしてくれるのではないかと思います。今、助けられながら歩いてきた山の石ころはそう思っています。

バトンを受けて欲しい人 🗨️ 川出富貴子さん

新理事長挨拶

■ 及川 郁子 (聖路加看護大学)

2010年7月より新たな役員のもとスタート致しました。2013年の総会時までの3年間の任期となります。どうぞよろしくお願い致します。

さて、日本小児看護学会は20年を迎え、ますますその活動を充実、発展させていく時期にさしかかりました。今日の子どもたちを取り巻く生活環境や社会は、さまざまな形で子どもたちの健康を脅かしています。また、小児医療も高度・複雑化する中で、安心・安全な看護を提供できない状況にあります。そのような中で歩み出しました新役員体制での今期の活動について、いくつか述べたいと思います。

1. 委員会活動の充実：学会では円滑な事業促進のために2007年に組織改正を行いました。今期は新たに国際交流委員会を設けました。また、業務検討委員会の名称を小児看護政策検討委員会とあらためました。会員の皆さまの協力のもと、今日の子どもたちを取り巻く保健・医療環境、社会環境の変化に対応しつつ、小児看護学会として行わなければならないことが何かを見極め、課題に取り組んでいきたいと思っています。

近々の課題としては、看護師の役割拡大に関するさまざまな論議に対し、関連学会とも連携を取りながら小児看護の方向性について検討していくこと、また2010年7月からの改正臓器移植法に対し、子どもの権利を擁護する立場からの取り組みも進めていく必要があります。

健やか親子21推進事業は2014年度まで延長されましたが、子どもの虐待、事故の問題は相変わらず解決の糸口が見え

ず、子どもたちにとって必要な予防接種に関してもその普及が課題となってきています。本学会としての重点課題を明らかにしつつ、小児医療・保健に貢献していきたいと思っています。

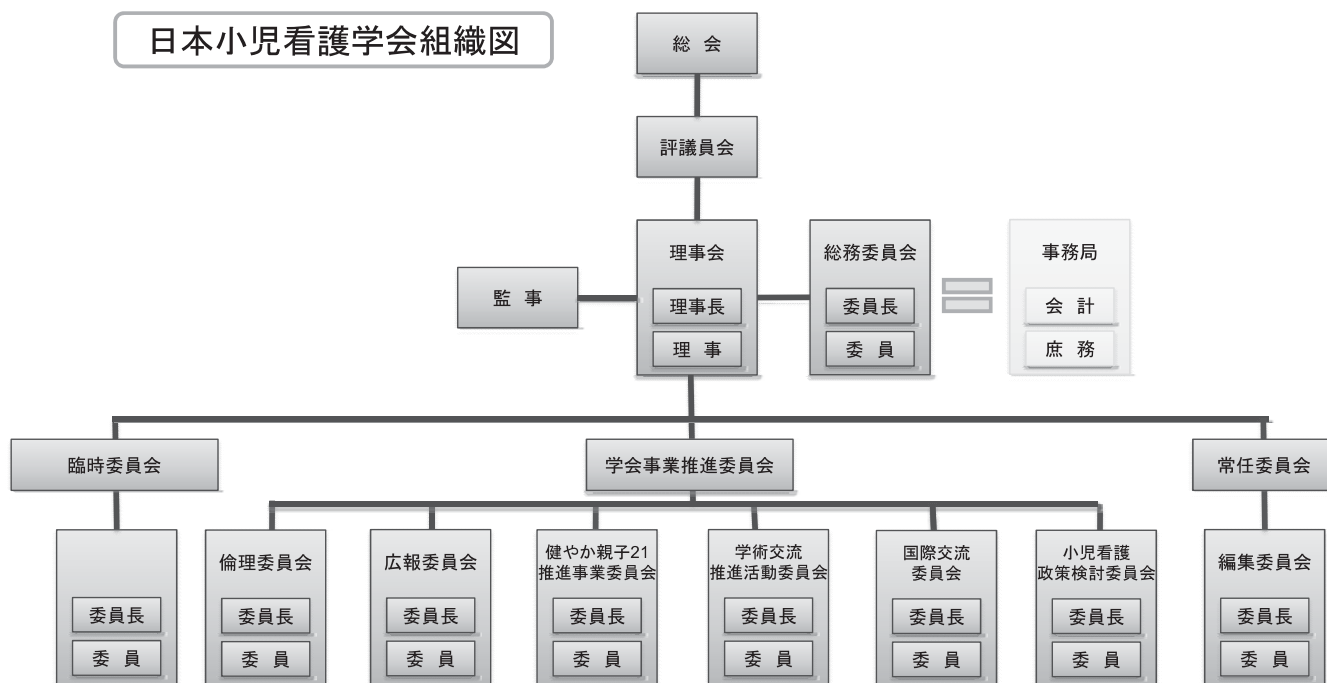
新たな活動としての国際交流では、アジア諸国の小児看護学会との連携や活動について検討していくことになります。2011年7月には、本学会も発起団体となっています世界看護科学学会の第2回学術集会在メキシコで開かれます。

2. 小児看護の専門性の向上に向けて：会員の方々が小児看護の専門性を高めていくうえで、本学会の果たす役割は大きいといえます。会員相互の交流を通して会員の方々が培ってきた知識や技術を集約・発信していくこと、またそれを蓄積していくことが必要と考えます。ホームページの充実を図り、臨床の方々の研究助成制度の活用を促進すること、科学的成果としての投稿論文の更なる充実などにも力を入れていきたいと考えています。

そして、ニュースレターやホームページを通じ、学会活動の様子を適宜お知らせしていきたいと思っています。会員の皆様のご理解とご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。



日本小児看護学会組織図



理事会メンバー

総務委員会 (及川郁子、川口千鶴、平林優子) 編集委員会 (濱中喜代)
 小児看護政策検討委員会 (日沼千尋) 国際交流委員会 (中村由美子)
 学術交流推進活動委員会 (草場ヒフミ) 健やか親子21推進事業委員会 (二宮啓子)
 広報委員会 (武田淳子) 倫理委員会 (内田雅代)
 監事 (飯村直子、石黒彩子)

日本小児看護学会 第21回学術集会ご案内

メインテーマ：子どもたちの未来は私たちの未来—保健・医療・福祉・教育の絆—

- 【会期】2011年7月23日(土)・24日(日)
【会場】埼玉会館(さいたま市)
【演題募集期間】2011年1月7日(金)正午～2011年2月21日(月)正午
【参加費用】事前登録：会員9,000円、非会員10,000円、学生3,000円
当日登録：会員11,000円、非会員12,000円、学生3,000円

【プログラム】

- 会長講演：「小児専門病院管理者の視点から保健・医療・福祉・教育の絆を再考する(仮)」
小木曾 國子(埼玉県立小児医療センター看護部長)
特別講演：「そだちの凸凹(発達障害)そだちの不全(子ども虐待)」
杉山 登志郎(あいち小児保健医療総合センター保健センター長兼診療科部長)
教育講演：「モンスターペアレント論を超えて—保護者の思いと背景を読み取る—」
小野田 正利(大阪大学大学院人間科学研究科教授)
シンポジウム：「保健・医療・福祉・教育—地域との連携の未来像を描く—」
テーマセッション(仮)：「子どもの臓器移植」
「気管切開を受けた子どもと家族の退院および在宅療養支援」
「小児救急認定看護師の現在・そして未来へ」
「新興感染症流行への対応、準備できていますか？」他
エキスパートパネル(仮)：小児看護教育/プレパレーション/在宅支援
その他：ナースング・サイエンス・カフェ「未来のナース集まれ！」
一般演題発表(口演・示説)/懇親会

【第21回学術集会 URL】<http://www2.convention.co.jp/jschn21/>

【事務局】学術的なお問い合わせ：

〒339-8551 さいたま市岩槻区馬込2100 埼玉県立小児医療センター看護部

E-mail: jschn21@convention.co.jp

演題登録、運営に関するお問い合わせ：

〒541-0042 大阪市中央区今橋4-4-7 京阪神不動産淀屋橋ビル2階

日本コンベンションサービス(株)関西支社

Tel: 06-6221-5933 Fax: 06-6221-5938 E-mail: jschn21@convention.co.jp

第8回(2010年度)東北地区地方会 開催報告

第8回(2010年度)東北地区地方会は、「子どものからだ」と心のケアに向けて」をテーマに、日本赤十字秋田看護大学学長の森美智子氏を実行委員長として、9月18日(土)に日本赤十字秋田看護大学にて開催されました。

秋田赤十字病院小児科第一部長である木村滋氏による基調講演「虐待家族と子どものケア」では、今年の臓器移植法改正により、被虐待児を厳密に除外する必要があることから、小児医療に関わるスタッフは、児童虐待に関する理解をさらに深め、適切に対応することが求められること、また患児へのケアとして暖かい関係を経験させること、子どもが本来持っている依存欲求を表出させることが看護師の役割であるとの話がなされました。

シンポジウムでは、「小児がん患児のトータルケア」をテーマに、小児科医の立場からは渡辺新氏(中通総合病院小児科

統括科長・診療部長)が小児がん治療と新規薬剤について、小児看護専門看護師の立場からは井上由紀子氏(東北大学病院看護部)より、医療スタッフ全員が協働して診断から治療、退院後のフォローまでを家族を含めて行うことがトータルケアであるとの話がありました。さらに小児がん(白血病)経験者の立場からは堀江久樹氏(東北福祉大学学生)より、現在に至るまでの経過とともに、ボランティアの相互扶助を目的としたNPO法人を立ち上げて活躍していることが話されました。

看護学生を含めて約100名の方々にご参加頂き、終了後に実施したアンケートでは、回答者の8割以上の方から、全体として「とても良かった」「良かった」と評価して頂くなど、盛会裏に終了することができました。

おめでとうございます

日本小児看護学会第20回学術集会の初日に、日本小児看護学会20周年記念式典が行われ、名誉会員証並びに研究奨励賞の授与式が執り行われました。

新たに名誉会員になられた方々

瀬谷美子氏、田島香代子氏、西元勝子氏、田原幸子氏

2009年度研究奨励賞受賞論文

石川真紀(2008)：

思春期にある先天性心疾患患児の自己開示と自尊感情およびソーシャルサポートの関連。日本小児看護学会誌、17(2)、1-8



名誉会員証授与式

◆ 編集後記 ◆

日本小児看護学会ニュースレター第37号をお届けします。新理事体制最初の発行でしたが、不慣れた編集作業に手間取り、お届け時期が遅くなってしまったことをお詫びいたします。今後も年に2回の発行を予定しておりますが、これまでのニュースレターの良さを継承しつつ、新たな企画を盛り込んでいけるよう、広報委員会メンバー一同で取り組んで参ります。皆さまからのご意見やご要望をお待ちしております。学会ホームページ(<http://jschn.umin.ac.jp>)もぜひご覧ください。

広報委員会メンバー

委員長：武田淳子

委員：塩飽 仁、白畑範子、今野美紀、遠藤芳子、大池真樹、小野寿江